

第2学年生活科「大すき やさいさん」についての実践 —自分の取組のよさや成長の自覚化を促す手立て—

砂野優樹 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

浅野陽樹 [鹿児島大学教育学系(技術教育)]

A Class Practice for Second-Year Living Environment Studies “Daisuki Yasai-San”(We Love Vegetables):Steps to Awareness of the Goodness of One’s Own Efforts and Growth

SUNANO Yuki and ASANO Yoki

キーワード：生活科、栽培活動、観察、自覚化、ワークシート

1. はじめに

1.1. 生活科の目標

生活科は、具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを目指すこととしている。平成29年告示の小学校学習指導要領（文部科学省，2018）において、資質・能力については次の3つの柱で構成されている。知識及び技能の基礎としては、「活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。」とされる。思考力、判断力、表現力等の基礎としては、「身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。」とされる。学びに向う力、人間性等としては、「身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。」とされている。

1.2. 本実践におけるねらいと手立ての概要

この教科目標を踏まえると、自立し生活を豊かにしていくためには、活動に没頭する中で、これまでの生活や学習経験で培った能力を発揮しながら、対象だけでなく、自分自身のよさに気づき、活動の意味や価値を実感し、生活をよりよくしていこうと活動し続ける姿が必要である。

自分自身についての気づきについては、小学校学習指導要領によると、次のようなことが重視されている。第1は、集団生活になじみ、集団における自分の存在に気付くことである。また、集団の中の自分の存在に気付くだけでなく、友達存在に気付くことも大切にする。第2は、自分のよさや得意としていること、また、興味・関心をもっていることなどに気付くことである。また、自分のよさや得意としていることなどに気付くことは、同時に、友達のそれにも気づき、

認め合い、そのよさを生かし合って共に生活や学習ができるようになることである。第3は、自分の心身の成長に気付くことである。

本単元において栽培活動を進めていく際には、気付きの質を高めるための表現活動を充実させていくことが重要であると考え。小学校学習指導要領解説には、「言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法により表現することによって、生み出した気付きを自覚することにつながるからである。さらに、表現する活動は、気付いたことを基に考え、新たな気付きを生み出し、気付きの質を高める深い学びにもつながる。」「何度も対象と関わりながら、表現し考えることを繰り返し、気付きを自覚し確かなものにしていく。自分の気付きや発見を友達と交流し伝え合う活動を通して、それぞれの気付きを関連付けることにもつながる。」とある。さらに、田村(2017)も、「生活科の学習活動の展開において、教師は、児童の思いや願いを実現する体験活動を充実させ、表現活動を工夫し、体験活動と表現活動が行きつ戻りつする相互作用を意識することが重要なのである。」と表現活動の重要性を述べている。気付きの質を高め、対象のみならず自分自身についての気付きが生まれるようにするためには、体験活動単体では十分な効果が発揮されない。体験活動と表現活動を繰り返し行っていく必要がある。

そこで、本実践では、子どもが自分の取組のよさに気付き、自分の取組のよさや成長の自覚を促す手立てについて、第2学年単元「大すき やさいさん」の実践を通して、気付きの質を高めるための観察カードを用いた観察活動と、気付きの質を高めるための観察カードを用いた交流活動、自分自身についての気付きを自覚化するためのワークシート(振り返りカード)を用いた毎時間の振り返り活動という、体験活動と表現活動とを繰り返すことを重視した。また、その手立ての有効性については、子どもの言動や観察カード、ワークシート等の記述から考察し、その成果と課題を報告する。

2. 実践単元について

2.1. 単元名

「大すき やさいさん」(第2学年)

2.2. 単元の概要

本単元は、生活科の内容(7)「動植物の飼育・栽培」を中心に構成したものであり、野菜の栽培活動を核としている(文部科学省, 2018)。実施時期は、第2学年の4～7月である。栽培する野菜は、ミニトマト、トマト、キュウリ、ピーマン、ナスの5種類の夏野菜とした。子どもの栽培意欲を高めるために、鹿児島大学教育学部の実習地へでかけ、自分が育てたい野菜の苗を選択して苗を受け取ったり、自分の野菜に名前を付けたりして自分の野菜に愛着がもてるようにする。栽培活動では、授業外でもいつでも野菜にかかわることができる教室の横で栽培する。授業では、自分と友達野菜や世話の仕方を比べ、野菜の特徴や新たな世話の仕方に気付いたり、以前の野菜と現在の野菜を観察カードや画像で比べ、野菜の生長や変化と自分の世話を関連付けて考えた

りすることができるようにした。野菜を収穫する活動では、収穫できた喜びや成就感を深めるために、収穫した実を持ち帰って家族と共に食べるようにしたり、収穫時の自分の気持ちをワークシートに絵や言葉で表現し、それを紹介し合う活動を設定したりした。

2.3. 単元のねらい

本単元は、自分の野菜を大きく育てようと自分なりに考えながら、野菜に働きかける活動を通して、『自分の野菜を大きく育てて収穫したい。』という思いや願いを達成していく楽しさを味わわせながら、活動の意欲を高めようとするものである。同時に、これまでの経験を基に、諸感覚を使って野菜の観察をしたり、試行錯誤して野菜に必要な世話を考えたりしながら、気付いたことを表現する力を培おうとするものである。また、野菜は生命をもっていることや生長していることに気付くことをねらっている。さらには、体験活動と表現活動の繰り返しを通して、自分の力で観察や世話をすることができた経験から、自分のよさや成長に気づき、これまで以上に植物への親しみをもち、大切にしようとすることをねらっている。

2.4. 子どもの実態

本単元を行うまでに、子どもたちは本校第1学年生活科の学習において、「さんぼ」「やったぞ、2年生」の学習を経験している。それぞれの単元の活動を通して、子どもたちのワークシートには、「散歩に行って、大学で〇〇を見付けた。」「1年生がプレゼントを喜んでくれて嬉しかった。」といった、対象への気づきを読み取れる記述が目立った。一方、活動や取組のよさや、自分自身の成長に関する記述はほとんど見られなかった。

本単元の実践前に、野菜栽培や学習意欲に関するアンケート調査を実施したところ、本学級の子どもたちは、全員が野菜栽培に対しての意欲が高く、多くの子どもが、野菜に必要な世話として水かけの必要性を感じていた。これは、1年生でのアサガオの栽培経験からと考える。しかし、野菜の栽培に必要なその他の世話（観察が必要：3名、虫取りが必要：4名、等）に気付いていない子どもが多かった。これは、約半数の子どもが野菜の栽培経験をしたことがないことや、野菜を育てたことがある子どもも家族と共に育てた経験であり、一人で育てた子どもが少ないことが要因として考えられ、したがって実際の活動において子どもの対象への気づき並びに自己への気づきの必要性につながる事象だと推察した。1年生でも観察活動を経験しているため、観察という取組のよさに関しては、再度そのよさを実感させていく必要があると考えた。また、学習の進め方に関する質問では、「自分と友達を取組を比べたことがある」と回答した子どもは34名中10名であり、友達を取組を自分の取組に生かそうとする姿にまでは至っておらず、困ったときの対応の仕方は、「友達に聞く」が最も少なかった。そこで、野菜の栽培活動に取り組む中で、自分と友達野菜を比較させたり、気付いたことを友達と交流させたりしながら、野菜には多様な世話があることに気付かせていくことも有効であると考えた。

このような実態から、野菜の栽培活動に意欲的な子どもたちであるため、主体的に活動に取り

組むことができると考えた。一方で、野菜や栽培活動に対する気付きの質を高める必要があると共に、交流活動を通して、自分自身についての気付きの質も高めていく必要があると考えた。

2.5. 単元の目標

本単元の目標は、生活科で育成を目指す3つの資質・能力から次のように設定した。

- (1) 自分の野菜が生命をもつことや生長していることに気付くと共に、野菜を生長させることができた自分のよさや成長に気付くことができる。
- (2) これまでの栽培経験や同じ野菜を育てている友達との情報交換、野菜作りに詳しい方に尋ねたことなどを基に、諸感覚を使って自分の野菜を観察したり試行錯誤しながら世話をしたりすることができると共に、観察したことや世話をしたことを絵や文に表すことができる。
- (3) 『自分の野菜を大きく育てて収穫したい。』という思いや願いを基に、諸感覚を使った栽培活動や友達との交流を通して、自分の野菜に親しみをもち、心を寄せながら大切に育てることができる。

2.6. 単元の指導計画（全11時間）

表1 単元「大すき やさいさん」指導計画

時	主な学習活動	想定した子どもの姿(気付き)	観察カード ^{注1)}	振り返りカード ^{注2)}
1	育てたい野菜を決める。	〇〇を育てたいな。(野菜への興味・関心への気付き)		
2	実習地に行き、苗をもらう。	僕の野菜は友達の野菜と違うぞ。(野菜の種類への気付き)	a	○
3	苗を鉢に植える。	アサガオは種からだっただけ、ピオラを植えるときと似ているね。(植え方への気付き)		○
4	自由に観察する。→諸感覚を働かせて観察する。	葉っぱがギザギザしている。茎の色が紫色だ。つるが出ている。(観察の仕方への気付き、野菜の特徴への気付き)	1～4	○
5	諸感覚を働かせながら観察する。(友達の野菜との比較)	私の野菜は〇〇さんの野菜にはない蔓がある。(自分の野菜の特徴への気付き)	1～4	○
6	前時に見いだした気付きを基に、野菜の観察・世話をします。	〇〇さんは、支柱を立てている。〇〇君は、日光の当たる場所に移動させている。僕の野菜にも生かせよう。(世話の仕方への気付き)	1～4	○
7	諸感覚を働かせながら観察し、野菜の変化(課題)に気付き、必要な世話を考える。	同じ野菜を育てているお友達は、葉っぱの匂いにも気付いていた。僕のトマトも葉っぱからトマトの匂いがしたぞ。葉っぱが黄色くなっているよ。葉っぱが虫に食べられているよ。(詳細な自分の野菜の特徴への気付き・野菜の変化や課題への気付き)	1～4	○
8	前時の気付きを基に、“野菜先生”にアドバイスをもらう。	野菜の葉っぱが〇〇なときは、△△すれば良いということが分かった。(自分の野菜に合った世話の仕方への気付き)		○
9	諸感覚を働かせながら、観察する。	前と比べると、葉っぱの色が濃くなっているよ。僕が肥料をあげたから、葉っぱが濃い緑色になったんだな。(野菜の変化・生長への気付き・自他の取組のよさへの気付き)	1～4	○
10	野菜を収穫し、喜びを伝え合う。	大きく元気に実った。お家の人に料理してもらって野菜を美味しく食べたよ。命を分けてもらって生きているんだね。(対象のよさや生命への気付き・達成感、成就感への気付き)		○
11	これまでの取組を振り返る。	野菜さんを大きく生長させて、たくさんの実を収穫することができたのは、毎日お世話を一生懸命頑張ったからだよ。(自分のよさや成長への気付き)		○

注1)観察カードの番号については，3.1. 図1 参照。

注2)振り返りカードについては，3.3. 図2 参照。

3. 本実践の実際

3.1. 気付きの質を高めるための観察活動（観察カードの工夫）

野菜の観察活動をする際には，いつでも野菜にかかわることができる教室の前で栽培し，諸感覚を働かせて自分の野菜をじっくりと観察できるようにした。観察に用いる観察カードもいつでも使うことができるようにするために，常時廊下に置いておくこととした。

また，個に応じて表現しやすい方法をとることができるように，観察カードは，常時1～4の4種類を用意し，子どもが自己選択することができるようにした（図1）。aについては，1回目の観察であるため，全員が単元の振り返り時に自分の成長を捉えることができるように，絵と文章の両方で記入することとした。

さらに，諸感覚を使って観察することで，野菜の生長や面白さに気付くことができるように，子ども一人一人を見取りながら，特に，諸感覚を働かせて対象を捉える視点を用いて観察している子どもや，過去の野菜や友達の野菜と自分の野菜を比較しながら観察している子どもの行動をクラス全体の中で価値付けたり意味付けたりして，全体にその観察の仕方が広がるような声かけを意識した。これらは，繰り返し観察をしていくうちに，野菜は生命をもっていることや生長していることに気付くためである。

併せて，対象を捉える視点をもって活動することができるようにするために，国語科の「かんさつ名人になろう」と関連させながら学習を進めた。具体的には，表2（附属小2021）のような対象を捉える視点を，国語の教科書を用いながら教室に掲示した。また，教師側は，表3の観察の視点（菅井・後藤2014,18頁）をもって指導に当たった。本実践は，子どもが自分のよさに気づき，自分のよさや成長の自覚を促す手立てについて取り組んだため，特に，「⑦自己とのかかわりへの気づき」に着目して考察した。

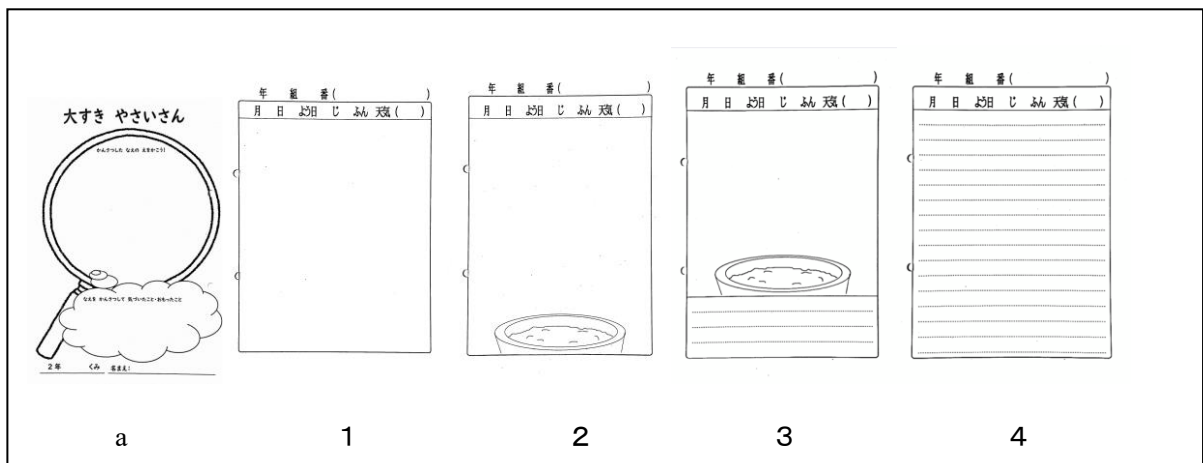


図1 観察カード（a;第2時に全員共通で使用，1～4：第4時以降子どもが自由に選択）

表2 野菜を捉える視点

自分とのかかわりから対象を捉える視点	対象を捉える視点
○ (野菜の・野菜栽培の) 面白さ、楽しさ、不思議さ、嬉しさ、悲しさ 元気に、上手に、おいしく 等	場所 (位置), 変化, 生長, 生命, 大きさ, 数, 色, 形, 長さ, 感触, 病気, 土, 水, 肥料, 日照, 気温, 虫, 時系列 等

表3 観察の視点

	視点 (気づきの質)	ねらい	具体例
①	存在への気づき	見過ごしていた小さな命にまなざしを向ける。	こんな所から新たに芽が出ている。
②	状態への気づき	よく見ると見えてくるもの。	こんなに小さな蕾があった。
③	関係性への気づき	生物同士や環境とのかかわり。	虫が葉を食べている。
④	全体の中での位置・価値への気づき	個々の生物の役割が全体の中で見えてくる。	枯れた葉っぱが野菜の肥料になっていたんだ。
⑤	命への気づき	目の前のものを命として捉え直す。	実の中に新しい種がある。
⑥	美しさへの気づき	見過ごしていた自然美を改めて実感する。	トマトの実が美しい赤色になった。
⑦	自己とのかかわりへの気づき	日頃忘れていた自然物とのかかわりを再認識する。	自分は毎日野菜を食べて生きている。
⑧	自然への畏敬・感謝への気づき	自分の命は自然に支えられた存在であること。	自分はあらゆる生命によって生かされていたんだ。
⑨	自然との一体感への気づき	私も自然の一員。	あらゆる命と一緒に生きている。
⑩	自然の浄化作用への気づき	自然の中で自己が癒やされることの実感。	自然と触れ合うと素直になれる。

3.2. 気づきの質を高めるための観察カードを活用した交流活動 (観察カードの使い方)

観察時は、野菜の特徴や生長、よりよい世話の仕方に気付くことができるようにするために、自分の野菜と友達野菜、自分と友達野菜の世話の仕方などを比べたりしながら観察することができるようにした。そのために、野菜の鉢の配置は、同じ思いや願いをもった子ども同士の学び合いが生まれ、必要感をもって交流活動に取り組むことができるようにするために、同じ種類の野菜が近くなるような場づくりを行った。

気づきの質を高めるためには、体験と表現に加え交流活動を充実させていくことが重要であるため、自らの気づきに注目し、他者との比較を通して自らの気づきを見つめ直すことが有効であると考え、お知らせボード (気付いたことを付箋に書いて貼れるボード) を作り、授業の中で、お知らせボードを基に考えを交流することができるようにした。お知らせボードに貼る付箋には、観察カードにかいた気づきから1番の発見や最も伝えたいことを選択して書くこととした。

3.3. 自分自身についての気づきを自覚化するためのワークシートを用いた毎時間の振り返り活動

自分自身についての気づき (自分の取組のよさや成長に関する気づき) を表現し、自覚化することができるようにするために、振り返りカード (図2) を作成した。振り返りカードは、記入する際に、前回までの自分の気づきを見て振り返ることができるようにするために、1枚に書きためていくことができるよう記入枠を配置した。

振り返りカードを使うタイミングとしては、毎時間 (第2時から) の授業の終末5分間程を使って、記入、発表をするようにした。

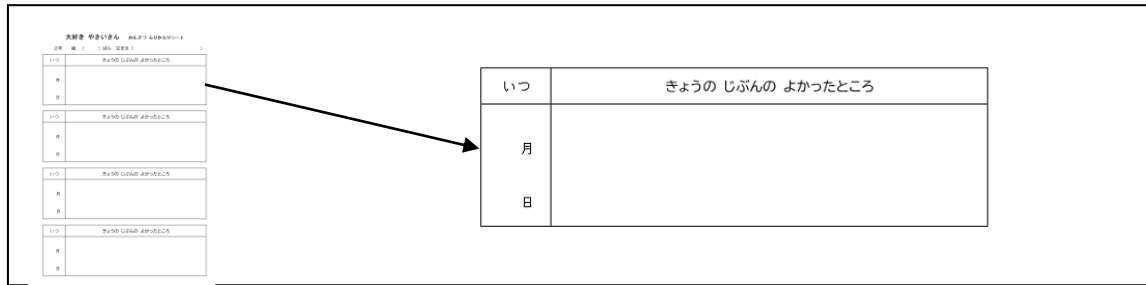


図2 振り返りカード

4. 本実践の考察

4.1. 気づきの質を高めるための観察活動に対する子どもの姿と考察

いつでも野菜にかかわることができる教室（1階）の前（廊下と反対側のドアを開けてすぐ。校舎と校庭の間。）で栽培し、諸感覚を働かせて自分の野菜をじっくりと観察できるようにしたことで、多くの子どもは、朝の時間や休み時間になるとすぐに教室を出て野菜の観察を行っていた。

観察活動において、3.1.で述べた手立てを繰り返していくうちに、子どもの観察の仕方に変化が見られた。初めの頃は、観察カード1や2の絵が中心のものが選択されやすい傾向にあったが、観察を重ねるにつれて、4の文章で気づきを書くものを選択する子どもの数が増えた。また、休み時間にも観察カードを選び、「野菜さんの観察に行ってきます。」と、観察に行く姿が見られた。

また、諸感覚を働かせて対象を捉える視点を用いて観察している子どもや、過去の野菜や友達の野菜と自分の野菜を比較しながら観察している子どもを価値付けたり意味付けたりして、全体にその観察の仕方が広がるような声かけを繰り返し行った。このような比較する気づきを意識付けたため、表現の仕方を工夫するようになり、具体的には観察カード1～3の絵のスペースに縦線を引き、自分で半分に分けて、前の野菜と現在の野菜を描いている子どもが数名見られた。

4.2. 気づきの質を高めるための観察カードを用いた交流活動に対する子どもの姿と考察

お知らせボードを作り、授業の中で、情報ボードに書いてあることを基に考えを交流する活動を設定したことで、子どもたちは観察で見いだした気づきを意欲的に付箋に書いてボードに貼る姿が見られた。しかし、気づきをボードに貼るまでは意欲的に取り組んでいたが、授業中にみんなで見つめる時間に、主体的に友達と交流する姿までは引きだすことができなかった。その要因として、多くの子どもたちは、「もっと書きたい。」といった自分の気づきを書いて表現することに意欲が向いていたためであると考え。そこで今後は、子どもが必要感をもって交流活動に臨むことができるような働きかけを行い、観察カードを用いて主体的な交流活動ができれば、さらなる気づきの質の高まりが見られると考える。そのために、観察カードの使い方も工夫する必要があると考える。自分と友達の野菜を比較することで、新たな野菜の特徴や生長、自他の取組のよさに気付くことができる。今後、観察カードの活用の仕方についてさらに追究していきたい。

4.3. 自分自身についての気付きを自覚化するためのワークシートを用いた毎時間の振り返り活動に対する子どもの姿と考察

表3の⑦に着目して、子どもの気付きを表4にまとめたところ、26番を除く全ての子どもが自分自身についての気付きを記述していた。前單元までは、自分自身についての気付きの記述はほとんど見られなかったが、本單元では、ワークシートに意図的に記述させたことで、このような変化が見られた。振り返り活動の回数を重ねるにつれて自分自身について気付く子どもの数が増えると予想していたが、気付く子どもは最初から記述していた。さらに質の高い気付きが見られた子どもは2名程いた。9番の子どもは第2～3時での振り返りでは、「観察名人になれた。」であったことが、観察や交流活動を重ねると第8～9時では「色々なことをカードにかいた。みんなの力で野菜さんを元気にした。目・鼻・口・耳を使って観察した。観察名人になった。」といった諸感覚を働かせて観察をしたことを自覚化していることが分かる記述をしていた。21番の子どもは、第2～7時までは、対象への気付きについての記述が主だったが、第8～9時では「前は小さかったけど、お世話をしたら大きくなった。」と、野菜の変化と自分の取組を関連付けて考えていることが分かる記述が見られた。また、7月半ば頃に野菜が枯れてしまい、落ち込んでいたが、第10～11時では、「野菜さんは枯れちゃったけど、お世話できてよかったです。」と、自分の取組のよさを自覚化していることが分かる記述が見られた。表4の空欄の子どもでも、発言から、自分自身についての気付きを自覚している子どもは他にも多くいた。しかし、やはり記述という表現をすることで自覚化を強調することができるため、記述をしてほしい。そこで、本実践の手立てに加えて、自覚化を促し、記述に至る新たな手立て（例えばワークシートの文言の工夫）が必要である。

振り返りカードの使い方については、毎時間記入することで、前時までの気付きを踏まえた気付きの記述ができることが分かった。また、自分の取組のよさや自分のよさは、毎時間記録しておかなければ忘れてしまうため、單元全体の振り返り活動を行う際にも、自分の成長を自覚化するために、毎時間の振り返りカードの記入は有効であると考えられる。

一方で、記述はあるが対象についての気付きにとどまっている子どもがいた（表4の空欄）。そこで、振り返りカードの文言や振り返り活動時の発問の見直しを行う必要があると考える。

表4 自己とのかかわりへの気付き（自分自身についての気付き）に関する記述が見られた子ども

観察 出席番号	第2～3時	第4～5時	第6～7時	第8～9時	第10～11時
1		色々なことを見付けられた。	野菜さんのお世話を頑張った。	ロイロノートで見たり実際に長さを測れたから、野菜さんも嬉しいかな。	
2		よく観察できた。	虫が葉っぱを食べていたから虫を取った。	観察をして、前と比べたからいろいろ分かった。	自分の気持ちがちやんと野菜さんに言えたからよかった。
3	野菜さんのことを心配できた。				
4	観察名人になった。		野菜さんの言ったことが分かった。	観察名人に近付いた。	たくさん活躍した。

表4 自己とのかかわりへの気づき(自分自身についての気づき)に関する記述が見られた子ども

5	野菜さんの心で何がほしいと観察できた。	観察がとてもしっぱいいっぱいいっぱいできた。	いっばい観察カードにかけた。	いっばい観察カードにかけた。	水があたるところに一生懸命運んだところ。
6	いつもよりよく観察ができた。	野菜名人に一步近付けた。	よく話を聞いた。	いつもよりすごくよく観察ができた。	野菜さんにいろんなことができた。
7				野菜名人に一步近付けた。	
8		観察を100パーセントやったけど、もっと観察をしたい。	野菜さんの問題を解決した。カラス対策をした。	いっばい心配なことを良くできた。これから、野菜さんは大丈夫になりそうです。	
9	観察名人になれた。	よく観察できた。	観察がレベルアップした。	色々なことをカードにかいた。みんなの力で野菜さんを元気にした。目・鼻・口・耳を使って観察した。観察名人になった。	野菜さんを動かして水が当たる場所に動かしてあげた。
10		よく観察できた。	よく観察できた。虫取りをした。よく話をした。	よく観察できた。お世話をしたら大きくなった。	
11			こんなことが原因だったと知った。		
12	野菜さんの心がすぐ知れた。	野菜さんのことをいっばい知って、文章にいっばい書けた。	しっかり話を聞いて、世話ができた。	野菜さんの観察をして、絵にいっばい表せた。	野菜さんの移動ができた。
13	観察名人に一步近付いた。				
14	キュウリの声が聞こえるようになった。		野菜さんのことがすっごいいっぱい知れた。	実が増えたことに気付けた。	
15	晴れた日に水をやるのが初めて知った。				
16	野菜さんを毎日観察することで、野菜さんがいっていることが分かった。		野菜さんが思っていたことが分かった。		
17		野菜さんの観察がよくできた。	野菜さんの悩みを解決した。	トマトの実があったことを観察カードにかいた。	水と肥料をあげて、夏休みだから水が出るところに置いた。
18	ちょっと観察名人に近付けた。	この前より観察名人にめちゃくちゃ近付けた。	色々なことに気付けた。	前より野菜さんの気持ちが分かった。	野菜さんにお手紙を書けた。
19	野菜さんの気持ちが読めた。	わき芽を自分から取れた。		観察が丁寧にできた。	観察名人になれた！！！！
20				いっばいお世話をしたから、カラスが来なかった。	野菜さんが赤くなっていてすごいと思った。
21	野菜さんと話せた。	野菜さんの変化が分かった。	実が赤くなるのが遅いの気付いた。	前は小さかったけど、お世話をしたら大きくなった。	野菜さんは枯れちゃったけど、お世話できてよかったです。
22	ピーマンがありさんたちに食べられていることに気付いてありさんを追っ払った。	いっばい観察したから野菜名人になれた。		触ったり見たりしていたら観察名人に近付いた。	
23	野菜さんの心が読めたし、発見がいっばいだった。	いっばい観察したら、ピーマンのことがよく分かった。観察名人に近付いた。	いろいろやってみたらできた。		今までお世話をしてよかったと思った。
24	昨日より育ってたことが分かった。なんでかという観察をいっばいしたから。	今日はちゃんとしてみつけられたものが多くて嬉しかった。			

表4 自己とのかかわりへの気付き(自分自身についての気付き)に関する記述が見られた子ども

25					野菜さんとお別れは悲しい。
26					
27	野菜さんの心が読めたからよかった。	野菜さん名人に一步近付けたからよかった。	ミニトマトのことをよく知れた。	野菜さんのことをよく知れた。	自分の気持ちを伝えられた。
28				野菜さんが元気になっていたから嬉しかった。	3年生になっても、野菜を育てたい。
29	1回目で観察名人になれた。次は、発見名人になりたい。	今日はいっぱい発見をした。また野菜名人に一步近付けたかも。	今までの授業でお世話の仕方が上手くなった。	野菜さんの悩みごとが解決してよかった。	今日は、いっぱい発見をした。
30		野菜さんのいいところを見付けた。	野菜さんのためにわき芽を取った。	野菜さんの健康観察をした。	野菜さんが育てよかったと気付いたこと。
31	野菜さんの心が読めた。	野菜さんのすごいところを見付けた。	枯れていたとき、水を一気にあげたらひびが入ることを初めて知った。	丁寧に観察した。	
32	野菜さんが元気に育ててくれて嬉しいし、元気よく育てた。				
33	観察をしてミニトマト名人になれた。	もっとミニトマト名人に近付いた。	色々なことを知れた。		色々なことを知れた。
34	観察したら葉っぱの形や茎のことをよく知れた。	キュウリのいろいろなことが分かって、観察名人に少し近付けた。	キュウリの元気がないところを見付けたから野菜先生に聞きたい。	野菜さんの元気なところや元気がないところが分かった。	野菜さんを取獲したときの気持ちも分かって、野菜さんにお手紙を書いた。

5. おわりに

本実践報告では、第2学年生活科「大好き やさいさん」についての実践を通して、子どもが自分の取組のよさや成長を自覚化するための教師の手立てについて、ワークシートを活用した表現活動を中心にまとめた。観察活動等の体験とワークシートに書く活動等の表現を繰り返し行うことで、子どもの表現内容に変容が見られたことから、体験と表現の往還の重要性が示された。そして、そのような体験と表現の往還を主体的に行っていく子どもを育成するために、観察活動に主体的に取り組むことができるように観察カードを自己選択することができるようにした手立てや、対象だけでなく、毎時間自分自身についての気付きの自覚を促すことができるようにした振り返りカードのような手立てが有効な手段となり得ることを明らかにすることができた。今回の実践を振り返り、これからも気付きの質を高めるための手立てをさらに追究していきたい。

引用文献

- 文部科学省(2018). 小学校学習指導要領解説生活編 東洋館出版
- 田村学(2017). 新学習指導要領の展開 明治図書
- 鹿児島大学教育学部附属小学校(2020)「学習指導案の書き方—新たな価値を創り出す資質・能力を育む授業をつくる—」
- 鹿児島大学教育学部附属小学校(2021)「新たな価値を創り出す資質・能力を育む授業の創造Ⅲ～学びの可視化を通して～」